



J.A.D.E

ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水道文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成14年5月30日
通巻26号

第25回定例研究会報告

平成13年度もおしせまった3月29日(金)、海外からの話題を2題集めて定例研究会が開催されました。

当日の演題は、以下のとおりでした。

1. カトマンズの水・し尿・衛生
ー文化人類学的視点からー
ネパール・トリブヴァン大学客員教授 辻井清吾氏
2. 発展途上国の水道の現状と問題点
海外環境エンジニアリング 与田博恭氏

辻井さんは、商社員という仕事の面でもまた、学術面でもネパールに長年かかわられた方。もともとは文化人類学を専攻され、ネパールでの恩師は川喜田二郎先生とうかがっています。現在、トリブヴァン大学で毎年集中講義の形で講義をもたれておられます。

講演では、そうしたご専門から、水・し尿・衛生に関する問題の社会的背景、とくに世襲的なカースト制度を含めた伝統的な社会構造ゆえに、途上国における都市環境問題がいかに複雑であるかについて話を展開されました。複雑化させている要因には、財政問題、都市計画の不備、行政の問題解決能力、住民の認識などがあること、また、観光立国を目指すネパールが、その玄関口であるカトマンズの環境問題が観光客離れをもたらしかねないことを指摘されました。

興味深く聴いたのは、カースト制度は穢れ(ケガレ)の概念が基底にあり、地位の違いが明白で、かつ職業と離れがたく結びついていること、そして「清掃カースト」という階層が存在し、そのカーストの人々は、市などの公的機関の清掃員として、雇用機会も多く、定年まで雇用されるので、ヒエラルキーは低い位置にあるものの、経済的に安定した立場に居ることということでした。一方、このために上位カーストは清掃は彼らに任せておけばよいとの意識が強く、自ら環境問題にも関与しようとしなそうです。

与田さんは、海外プロジェクトに数多く携わってこれられておられますが、先日今世紀最初の独立国となった東チモールやグアテマラでの経験を中心に話をされました。

多くの途上国の水道インフラが、いかに機能していない状況であるか実例をあげるとともに、これまでの途上国支援プロジェクトの問題点を指摘されました。とくに、援助国の資機材(とくに機電関係)を使ったケースでは、移管後メンテナンスができない状況が各地に見られ、被援助国が自力で補修できることが、最重要な要件である

ことを強調されました。すなわち、援助される側の立場からの技術の導入が重要であり、そのためには高精度や効率化といった日本流の設計思想から脱却すること、そして、現地にふさわしい技術を開発する能力を有する人材を援助する側、される側の双方で

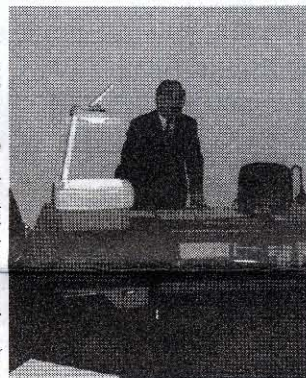


与田博恭氏

育成することの重要性を指摘されました。日本の援助では、どこへ行ってもワンパターンの浄水プロセスが提案され、途上国側にとっての適正技術を提案するという点では遅れがみられるとの見解が示されました。

そんな堅い話のなかで、地下水探査法である「こっくりさん」を使っ埋設管調査に応用した経験など楽しい話も披露されました。また、東チモールでは、ローカルスタッフとして水道技術者を雇わず、普通の民間人をインタビューしながら採用し、彼らへのさまざまなトレーニングから入って、現地調査を行ったという話も印象に残りました。このほかに、バングラデシュの「貧者の銀行」といわれるグラミンバンクによるマイクロクレジット、各国の不透明度指数で日本が上位にあること、ライフサイクルの環境負荷軽減を目指すクリーナープロダクション、トービン・タックスなど、途上国を巡る新たな視点についても話題が提供されました。

最後に缶ビールで乾杯し、時間内でとることができなかった質問が飛び交い、講演者を交えた楽しいひと時となりました。この場で、平成14年度より、新たな分科会として「海外下水道文化研究会」を開いていきたい旨提案させていただき、賛意を得ました。貴重な講演で充実した時間を過ごすことができましたが、平日夜の講演2題は時間的に非常にタイトであり、いまし配慮が必要であったと思います。(文責 酒井彰)



辻井清吾氏

第15回 尿管研究会 例会のお知らせ

日時;平成14年7月5日(金) 18時30分~20時30分
場所;東京ボランティアセンター・市民活動センターB会議室・セントラルプラザ10階
新宿区神楽河岸1-1 (TEL: 03-3235-1171)
JR、地下鉄 飯田橋駅下車徒歩1分
話題;「地方都市における下水道整備の経過」
(中国広州方面への視察報告を含む)
講師;菅家啓一氏(尿管研究会会員)

急ノらバ6ガ循古天 (2)

本会副代表 木村淳弘

砂漠の雨

砂漠で雨に遭いました。突如として雷がして雨が降りました。非常に珍しいことです。相当強い雨でしたがすぐやみました。

しかし、砂漠の雨は災害を起こします。突如として、低いところが川となり、道路も川となります。草、木が生えていないので、土石流が発生します。その土石流が道路、橋を流してしまいます。

平らな地形の所には湖が突然として現れます。そして、次第に水は砂漠の中に消えていきます。信じられない光景です。

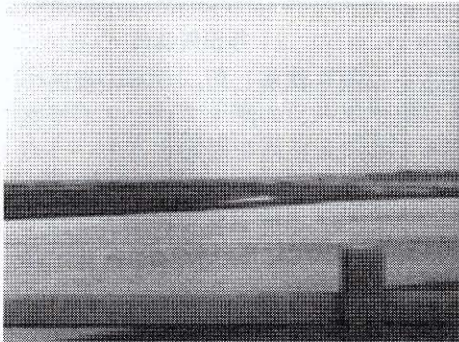
いので分からないのです。

パキスタンに水洗便所が普及しているのは、イギリスの植民地であったからだと思います。

日本の下水道

フンザのアルチット村で看板を見つけました。それには「日本の好意により、日本大使館の協力の下に下水道を整備する。」と書かれてありました。現在管工事がほぼ終わり、処理施設の建設をしているとのことでありました。残念ながら時間の関係で見ることができませんでした。

日本の援助はこの様なパキスタンの田舎まで及んでい



突然現れた川



土石流で流された橋



中国・パキスタン国境

カシミール地方

国境のクンジュラブ峠は標高4730mの峠であり、高山病に対する注意が必要です。私が訪れたときは、同時多発テロ以前であったため、のどかな国境でありました。中国パキスタン両国の兵隊が雑談していました。

国境からパキスタン側のカシミール地方は標高7000mから8000mの山々が連なる山岳地帯です。標高世界第2の山、K2もこの中にあります。しかし基本的には乾燥地帯です。6000m級以下の山には雪がなく険しい岩山となっており、草木も生えていません。まさに活動期の山岳地帯の様相を呈しています。

中国とパキスタンのトイレ事情

中国を旅行した人が経験するのは、地方のトイレの汚さと、臭さです。特に公衆トイレはくみ取り式で、四角な穴が開いているだけのトイレが一般的です。金隠しがないためどちらを向いて用を足したら良いのか分からなくて困ることがあります。中国人は入口の方に向かってしゃがむようであります。

パキスタンに入るとトイレは水洗便所が普及しています。地方のレストラン、公共トイレでも水洗になっています。便器は日本式トイレの金隠しがないタイプで、足置きのステップが付いており、JRの駅のトイレの様な形式です。やはりどちらを向いてしゃがむのか分かりません。パキスタン人の用を足しているのを見たことがな

るのに興味しました。村は小さな旧集落で、衛生上の問題で工事に着手したようであります。

完成は2001年12月となっていました。テロ騒ぎで完成したか心配であります。

洪水の災害

登山基地で有名なフンザの町の近くで洪水の跡に出会いました。約1週間前に雨が降り、氷河から鉄砲水が発生し、土石流となって、村を埋め尽くしたようであります。住民が呆然として立っていました。救助の手はまださしのべられていないようでありました。厳しい自然の一面を見せつけられました。

黒い氷河

フンザの近くのホパール氷河を見に行きました。泥を被り、岩を巻き込み、荒々しい大きな黒い氷河でありました。この地方の氷河は今なお、岩を削り、活動している氷河に思われました。我々が他の地域で見る、白い穏やかな氷河とは異なって、荒々しい氷河でした。

地球温暖化の証人

フンザからイスラマバードに行く途中の町キルギットの近くで磨崖仏を見ました。約60m上の岩壁に彫られていました。現在では近づくことはできません。7世紀から8世紀に彫られたようであります。当時はこの一帯は氷河に覆われており、当時は足場の必要もなく、彫れ



たこのことであります。約千数百年の間に厚さ60mもある氷河が消滅したことを表しています。この仏様は地球温暖化の証人であります。

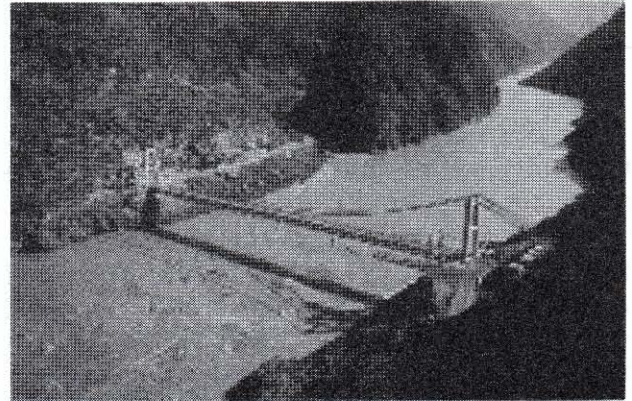
濁流のインダス川

キルギットからイスラマバードへの道はインダス川沿いに下っていきます。インド文明の発祥の川、インダス川はカラコルム山脈を水源とし、岩山を削っていく、荒々しい濁流の川でありました。

おわりに

以上 旅行中の水に関することを述べてみました。この地域は世界でも有数の厳しい自然環境であると思います。しかしこの地域の住民は数千年に渡りこの厳しい自然の中で力強く生きてきたことに感動を覚えます。この地域にとって水は非常に貴重なものであります。しかし、一方乾燥地帯であるこの地域においても、水は災害

を起し脅威となることに、驚きを感じざるをえませんでした。



濁流のインダス川

無洗米は環境にやさしいか

有限会社てんち（天地米店） 小澤 量

最近、生協を中心に無洗米が伸びています。自治体などでも、水環境改善のためと称して給食等に無洗米使用を勧める動きが出ております。それを奨励する議員からの質問も議事録で見かけます。

私は、米屋を営む立場から、無洗米の知られざる面を調査中です。是非、いっしょに考えていただくとともに、誤解等あれば何なりとご指摘願えないでしょうか。

無洗米は、要素還元主義の象徴的製品です。現代の私達は物事の全体像を把握せずに、全体を部分に分けて、それぞれの部分のみに対応するという方法論に浸っています。ある部分を変更したり改善したりしても、それが他の部分にネガティブに影響していき、結果として全体が良くならない。逆に言うと、何かを良くしたければ、物事のつながり（関係性）を良く理解した上で、包括的なアプローチをしなければならない、ということを見失いがちです。

病気に対する西洋医学的対処もそうですし、最近の小中学校での完全週休二日制や総合学習の取り組みもそうです。文部科学省の主張する、「子供は学校の中だけではなく、地域の中でも教育されるべきである」ということは正論ですが、その地域の教育力が低下しており、神戸の少年事件の背景でもある「生活感のない無味無臭の地域」をどうにかする働きかけが同時に行われなければなりません。この実行には、官庁で言えば、産業経済省・国土交通省・農水省・環境省・厚生労働省が全体のベクトルを合わせて行動しなければなりません。果たしてそういう意識が政治家・官僚・マスコミ・国民にあるのでしょうか。

無洗米は、そういう私達にとっても似合いの商品です。環境に優しいという口当たりの良いフレーズは十分な検証が必要です。部分にとらわれて全体が見えないと簡単に売り口上にひっかかってしまいます。米（ヌカ）と水環境を考える時、最低限知らなければいけないことは、下水処理

（理論と現場と歴史）・精米工場から排出されるヌカの処理の現状です。市町村の給食担当者は、下水道担当者などに確認すれば良いわけですが、ほとんどそのような意識や情報の交換はないようです。縦割り組織という要素還元主義の弊害です。

無洗米は、「全国無洗米協会」のHPなどによって次のように宣伝されています。

- ヌカを精米段階で除去することで、家庭で米を磨ぐ必要をなくした製品である。
- 米の研ぎ汁は一旦下水道に流れると、川や湖、海にまで流れ、富栄養化の原因となるが、これが排水されない。
- おいしくて栄養豊富。
- 除去されたヌカは、肥料や飼料として有効利用されている。

調査結果から得られた私の主張は以下のとおりです。

1. 米の研ぎ汁が環境汚染の元凶という言い分は誤り。
2. 無洗米は、普通米に比べて栄養分が多いということも針小棒大。
3. これまで米ヌカは業界内でリサイクルされていたが、無洗米ヌカについては処分が問題になる可能性がある。

米の研ぎ汁は下水道が整備された地域でそれほど問題なのでしょう。昔は、もっと精米の悪い（精白度の低い）お米をもっとたくさん食べていました。そして、ほとんどの台所排水は、今のように下水処理をされないまま、河川に入っていました。そのとき、河川汚染はあったのでしょうか？この本源的質問を回避して、現在の下水道全体の問題を米の研ぎ汁に集中させて一般消費者に一面的な情報を提供することになってはいないかと、お米に携わるものとして考えております。

また、一部の無洗米精米機は、灯油を使用しており、別途の環境負荷をもたらします。

要するに、宣伝されている無洗米の長所は、販売するために無理矢理作り出した議論ではないか、ということです。

1. の主張について：窒素・リンの排出源は、トイレが70～80%。研ぎ汁は、むしろ下水処理しやすい物質です。米ヌカのように植物由来のBOD（汚れの指標）は下水処理しやすいと下水施設の現場の方も言われますし、さらに現在の活性汚泥法を用いた下水処理において、活性汚泥の形成に米ヌカが向いていることを裏付ける研究もあります。（http://www1.ttcn.ne.jp/~kankyo/lab/t1_2.htm）

無洗米が環境に良いというふれこみは、本来、水質のことを言うなら森林・河川・湖沼・上水・下水・農業用水全体の体系で考えるべきところを、米の研ぎ汁をスクープゴートにしてマイクロの問題を急所のように見せ、一方、利便性だけで購入することにためらいを感じる消費者への免罪符とする巧みな理論です。

生活排水の一部である台所排水において、本当に問題なのは、食物の輸入増加に伴い循環されずに排出されるだけの窒素・リンが増えてしまっていること。また、下水道整備をすすめるほど、水質は悪化する可能性もあることが知られていないことも問題です。市民は、とにかく下水処理を助ける生活を心がけるべきである（雨水利用・洗剤の適量使用・朝シャンなどしない、など）と考えます。

2. の主張について：

ヌカを取り去り、うまみのもとである部分（アリューロン層＝白米とヌカ層の境目でビタミン等を含んでいる）をきれいに残してある。このために、無洗米はより美味しくなる、というふれこみです。「アリューロン層」がうまみのもとだという概念は業界ではそれなりに認知されていますが、本来はお米ごとの美味しさの差を説明する理論です。精米の違いによる美味しさの差を説明するものではありません。精米の仕方では、玄米や胚芽米がおいしいことは説明できません。

「おいしいコメはどこがちがうか」（農文協）、で無洗米のトップメーカー東洋精米機・雑賀慶二社長は、以下のように書いています。

「糠層は数種類の層より成っており、最下層はアリューロン細胞層である。コメの場合は、糠の最下層部が胚乳（デンプン層）の上層部に細かな根が生えたように複雑に入りこみ、線引きできないほどに分厚い境界線を形成しているのである。要するに糠層の下層から胚乳（デンプン）に至る間は、明快な境界がないものととらえるべきものなのである。」

一方で、無洗米協会のHPなどでのPRを見ると、「明快な境界がないものととらえるべき」なのに、うまみの層がデンプン質の上にギアの歯のようにきれいに並んでいて、うまみ層がきれいに残るので無洗米はおいしい、と表現しています。消費者を誘導していると言わざるとえません。

また、米の表面のビタミンが残るので栄養価が高い、とも言っていますが、それが比に本当だとしても、その差は本来精米で失われる量と比べれば小さいものです。精米で失われる栄養素は他にもありますから、本当に栄養を採りたいなら、胚芽米か強化米を食べればいはずです。

これなども、「差」の程度がわからない消費者を誘導する話です。

そして、私の知るかぎり、業界関係者で無洗米がおいしいと言った方はありません。「すかすかで、お米の味がしない。」「お米の旨み・甘味を感じない。」という意見が多数を占めました。また、「売れりゃそれでいい。どうせ、消費者の舌はもうかなくなっている。」と無洗米を販売しています。

また、消費者が無洗米を食べて美味しかった、という記事を見かけますが、共通して言えることは、産地や品種に言及がないことです。便利だから無洗米を食べているというある消費者の方は、「無洗米は何を食べても同じ味がする」と教えてくれました。

日本中で色々なお米が作られています。同じ品種でも産地によって個性があります。農家による違いもあります。そういう個性が反映しにくい仕組みになるのかと思います。また、炊いている時の湯気の香りがしないお米を美味しいと思う消費者をこれから作っていくのでないか、と思うと残念な気持ちになります。

3. の主張について：無洗米工場では、ヌカが農家や園芸から引っ張りだこだと言っています。研ぎ汁の中のヌカは、ヌカの総量からすればわずかな量です。ここでも、無洗米協会は、米ヌカの全体像を見せることなく、総量からすればきわめて限定的な量を拡大して説明しています。

一方、今までもお米の重量の約10%にあたるヌカは、主にサラダ油を作るために油脂工場に引き取られていました。米ヌカは、全国で大体年間100万トン排出されます。米業者で、その内約80万トン排出、その60%くらいが、サラダ油に、残りが冬場のえのきたけの栽培土や飼料・肥料・漬物に回ります。

ところが、困ったことに無洗米工場から出る顆粒状のヌカは、油脂工場が引き取りません。そこで無洗米ヌカを飼料・肥料に使えないか検討しているそうです。飼料・肥料にしても需要は限られています。最近の情報では、無洗米の顆粒状ヌカを鶏卵用飼料である魚粉に混ぜてかさを増やすということがあるそうです。さらに、最新情報では、これもBSE問題の影響でできなくなります。農水省管理のもと、100%魚粉のものしか、飼料会社は買えなくなるそうです。混合飼料という形では、魚粉にヌカを混ぜることは法的にも問題ないそうですが、混合飼料の需要は低下しつつあるそうですので、この分野で処理することはいずれにせよ難しいと思われます。

今までは少量だった無洗米の顆粒状ヌカは、大した問題ではなかったのですが、これからが大変のようです。協会・メーカーは、「米の精」なる名称で無洗米ヌカを販売するようですが、全国的に本当にはけるのか、はけない場合はどうなるのかが心配されます。

茨城の農家から出荷されたお米が東京で無洗米になり、その無洗米ヌカをその茨城の農家で使ってくれないかという話も聞いております。15円/15キロです。私の店に集荷に来るヌカ業者は、15円/15キロで集荷してそれを油脂メーカーなどに販売しています。東京から茨城まで運んで安くてもいいから引き取って欲しいということは、いかに商売になっていないかを証明しています。



最後に、無洗米が普及することによって予想される問題を指摘しておきます。

1. 災害に強い町作りへの影響

神戸の震災後、「災害に強い町作り」が提唱されています。もし、無洗米が一般的になるとどうなるでしょうか。

無洗米設備は、これまでの精米設備に比べると非常に高額です。一部の大手精米業者だけが買うことが出来ません。この傾向が進むと、卸も小売も在庫を持つ必要がなくなります。現在、地方の大型精米工場への精米委託が増えています。

経営者としては、在庫の資金やスペースを心配する必要がないのはありがたいことですが、いざ災害が起こった時はどうなるのでしょうか？現在、府中市の米穀小売商組合は、市と契約を結び、災害時の協力店舗となっています。玄米在庫が市内にない状態では、全く協力することが出来ません。また、お米を研ぐという技術を忘れてしまった状態では、無洗米しか使用できません。技術・設備・品物を分散化しておくことこそが災害対策であるにもかかわらず、全く反対の方向に進んでしまいます。

2. 環境悪化の懸念

無洗米設備では、最後に灯油を使ってヌカに熱処理を

加えます。表向きは研ぎ汁を河川に流さないで済むということですが、裏ではこのようにこれまで要らなかったエネルギーを使います。

また、あるメーカーの無洗米設備は中身が分からなくなって、品種を変えると設定を変えなければならず、また設備が高額なために、一つの工場で多数品種を取り扱うことは難しいので、あらゆる品種を無洗米にしようとすると、配達ルートが多様化・少量化します。

小売は複数卸と付き合い、卸は複数工場と付き合う。すると、どうなるのでしょうか？非常に少量商品が流通するために、今までより多くのトラックが行き来します。すなわち、東京都などで問題になっている排気ガス規制に逆行します。

編集者注：本記事は本会へ下水処理に関する問合せを受けたことに端を発し、原稿をお願いしたものです。環境へのやさしさが強調される裏には、気が付きにくい問題が隠されていることも少なくないことを示す好例考案掲載いたしました。小澤さんの連絡先は以下の通りです。

東京都府中市宮町1-34-14-101

TEL 042-361-2511 FAX 042-365-7050

E-Mail rio-ozawa@mub.biglobe.ne.jp

第13回・14回し尿研究会の報告

し尿研究会会長 地田修一

第13回：12月15日（土）18時より飯田橋の東京ボランティア・市民活動センター会議室において、地田により「英仏における水洗便器の技術開発史」と題する講話を行いました。年末の休日でしたが、10数名が参加しました。

講話の種本となったのは、2冊の翻訳本「トイレの文化史」（フランス。ちくま学芸文庫）と「風呂トイレ賛歌」（イギリス。晶文社）です。水洗便器が普及する前の、長い間のし尿処分との悪戦苦闘の話が前段にあり、それが水洗便器の発明によって解決の方向性を見出したことを、多くの図を用いて説明しました。特に、「トイレの文化史」の著者ロジェ＝アンリ・ゲランが述べている「水洗装置付きのトイレが成功し、フランスの全家庭への普及が達成できるかどうかは、まず十分で規則的な水の供給によって条件付けられた。…そして、次に使用後の水を始末できる可能性がなければならなかった。」とのフレーズは、水洗トイレの恩恵を当たり前のように享受している私たちに、技術の開発当初の原点に立ちかえって物事を熟慮しなくてはならないことを教えてくれます。話の骨子は次の通りです。

I. フランスにおけるし尿の処分

便所は屋根裏、各部屋には「おまる」を、階下には「糞尿溜め」を設置し、便所との間を丈夫な導管でつなぐことを推奨（16世紀半ば）、しかし法令違反が後を絶たない状況が続く（17世紀後半でも）。仮に、設置しても糞便が詰まりトラブルが絶えない。ようやく、パリにおいてはイギリス式の水洗便器の設置を義務づけた（1894年）。

II. イギリスにおけるし尿の処分

し尿を直接地面や運河に落とす便所「おまる」が一般的に（15世紀頃から）、1596年：ハリントンが水洗便

器の原型を考案。（普及せず）「パン・クロゼット」（導管により糞便を階下の溜めに落とす）を不都合が多かったが使用。カミングズが水洗便器を再発明（1775年）。プラマがこれを改良、このタイプがその後の定型となる（1778年）。陶製の一体型のもので製造可能に、今日への流れができる（1870年頃）。

今回は、この講演の後、会員の石井明男氏からスライドを使ってのインドネシア、フィリピンなどのゴミ処分、下水処理についての実態報告がありました。

第14回：3月30日（土）18時より前回と同じ会場において、会員の鈴木和雄氏より「海洋投棄とその歩み」と題する講話がありました。10数名が参加し、初めての方も2名おられました。

大正末期から昭和の初期にかけて、し尿の肥料としての価値が低下し、し尿が町にあふれる状況を呈するようになりましたが、大都市東京ではそれが特に顕著に現れました。そんな折りに、し尿をタンカー型の船に積んで沖合にまで運び、海洋投棄する処分法が実施に移されました（昭和9年頃）。

尿尿の投棄船には、都が自前で建造したものと民間の持ち船をチャーターしたものとがありました。太平洋戦争末期からはしばらく中止されていましたが、昭和25年から再開され、平成11年3月まで続けられました。

鈴木さんは、投棄監視員として、また実験立ち会い者として、しばしば投棄船に乗船した方です。実地の経験を踏まえた、迫力のある語り口で、尿尿を海洋投棄せざるを得なかったいきさつから、その終焉に至るまでを、多くのエピソードを織りまぜて話されました。沈降速度を高めるために硫酸第一鉄を添加するようになったこ

とにより、投棄海域の状況は格段に改善されたとのこと。後半は、清掃研究所の設立の経緯や尿尿の処理技術の変遷にまで話が及びました。話の骨子は次の通りです。

- ①海への投棄のはじめ、②直営船の建造（昭和10年から）、③戦時による投棄船の徴発（昭和19年から中止）、④終戦後の状況（昭和25年から再開）、⑤海洋汚染対策としての薬剤添加（昭和39年から）、⑥海洋投棄の終末期

この講演の後、地田から、し尿研究会が編著者となって「トイレと尿尿のはなし」（仮題）を出版したい旨の提案し、了承されました。

これは、し尿研究会の例会で発表された話題を中心に、下水文化研究会の刊行物にすでに記載されている記事をも加えて、ふだん口にすることをためらいがちな「尿尿」に関する幅広い話を、一話読み切り型で、30話ほどにまとめようというものです。新書版で200ページ程度の本を予定しています。

大きな項目としては、プロローグ、聞き書き（みやこ肥料・し尿消化槽・汲取り業・バキューム車・し尿取扱い所）、言語学的・古文書解説、様々な分野からのアプローチ（歴史・文学・芸能・絵画・写真など）、処理・処分技術、世界の状況、人体機能の面からなどを予定しています。刊行は来年の5月頃の予定です。ご期待ください。

編集後記 ▶ 新たな年度を迎えたと思えば、もう梅雨に入ったような天候の日々もあつたりしますが、ますますご健勝のことと存じます。昨年度は、通巻21号から25号までのふくりゅうを発行することができました。今年度は、より定期的に隔月の発行を目標としていきたいと思えます。本号の小澤さんのように何なりと原稿をお寄せいただきたく思えます。▶ 前号でお知らせした今秋のイベント「水と森と食の祭典」については、準備が進んでいるようですが、地元関係者の中での調整にも時間を要しているようです。私たちが何気なく使っている水の源を尋ね、その保全を考えるとともに、地元地域の活性化にもつながるイベントになって欲しいものです。本会も企画面、実行委員会メンバーとして積極的に参加していただきたいと思えます。詳細が決まり次第お知らせいたしますが、今のところ10月の第3週の週末（18～19日）に予定されています。不確定ですが、予定していただけたら幸いです。▶ 中川金治翁の顕彰については上記のイベントとは別途に地元長老の主催で行われるということで話が進んでいるようです。個人を公式に顕彰することに一部から異論があったそうです。政治家のように肩書きの付いた人には勲章が与えられるのに、草の根で働いたことが大きな礎となっても認められない、そんな考えも改めたいですね。▶ 次号では、総会の報告、バルトン忌のお知らせなどをお伝えします。（酒井 彰）

運営委員会・事務局より

(1) 下水文化叢書7号をお届けしました。

過日、会員各位のお手元へ森田英樹著「便所異名集覧<増補版>」を下水文化叢書第7号としてお届けしました。多方面の分野で有用な資料になること請合いで、簡潔でかつ奥深い解説文は著者の造詣の深さを伺わせます。多くの方にご紹介頂ければ幸いです。

(2) 第6回下水文化研究発表会講演集の購読お勧め

前号でご案内しましたが、昨年行った標記研究発表会講演集の購読をお勧めしています。今日民営化の議論が盛んに行われているなか、このテーマに関する記念講演、研究発表論文は一読の価値があると思えます。

(3) 評議員会を開催しました。

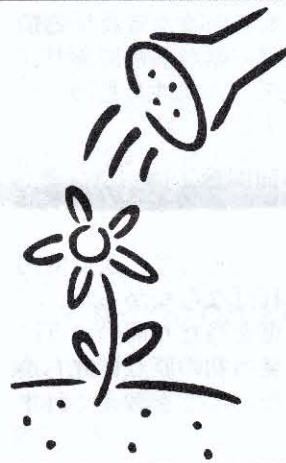
5月10日(金)評議員会を開催し、西堀代表評議員をはじめ3名の評議員の方に今年度総会で審議いただく議案について、ご意見を伺いました。会の運営も財政的に厳しさを増しているなか、昨年のように外部の助成金を獲得するほか、今一度正会員・賛助会員の拡充を図る必要を指摘されました。

(4) 名簿作成にご協力を

会員名簿発行は、昨年度実施予定の事業で積み残しになっていることなのですが、新年度を迎え多くの方が異動されました。つきましては、できるだけ会員名簿に反映できるよう異動の通知をお知らせいただくと幸いです。

(5) 図書残部の申込みならびにご利用のお願い

名簿作成にご協力をこれまで機関誌に執筆いただいた方々に残部を活用いただくべくご希望を問い合わせ致しております。執筆者で案内を受け取られた会員の方々におかれましては、是非お申込みいただき、本会の既刊図書をご活用いただけたら幸いです。（引き続き受け付けます。）



ふくりゅう 通巻26号 主な目次:

第25回定例研究会報告	1
シルクロード水紀行(2)	2
無洗米は環境にやさしいか	3
第13・14回し尿研究会報告	5

特定非営利活動法人
日本下水文化研究会
〒162-0067 新宿区富久町 6-5
NJS 富久ビル別館3F

TEL & FAX 03-5363-1129
jade@jca.apc.org
aan63630@syd.odn.ne.jp

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご欄ください。
<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>